「今後の県立高校に関する地域検討会議（第３回）」記録要旨【胆江ブロック】

平成 27 年 10 月 30 日（金）
奥州市水沢地区センター　視聴覚室

【江口　奥州市副市長】

・ 高校の選択肢は今まで通り確保していただきたい。
・ 県全体では中学生の希望と設置高校の割合が合っているかもしれないが、県全体と地域の両方を考えた上で検討してほしい。例えばこの学科はこの地域にあった方が良いのではないかという提案をいただき、地域としてそれを一緒に検討していくという形等、もっと前向きな話もほしい。
・ 地方創生の取り組みとの関係もあるが、通学可能な範囲であっても地域外への通学となると地域とのつながりも薄くなる。地域の中に就職、進学に対応できる学校を存続するためにはどうしたらよいのかということをまず考える必要がある。
・ 財政的な問題はあるが、地方創生の中で若い人たちをどのようにしていくかという問題は非常に重要だと思うので、単に合理化ではない視点も必要である。合理化と共に前向きな視点があると将来に向かって良い計画になるのではないか。

【県教委】

・ 通学についてのアンケート結果では、かなり広域的な範囲を考えていることが見受けられる。１時間以内を許容しているとの回答７割、１時間 30 分までが２割弱であり、当ブロックではバス、列車で通学可能な範囲までが他より低く 37.1%、親の送迎が 37.4%であり、必ずしも公共交通機関での移動だけではない通学を考えている状況が見られる。
・ 金ケ崎町では岩手中部ブロックへ、前沢区では両磐ブロックへの移動があるので、ブロック内だけで生徒の移動が収まらないところがある。生徒が選択肢を広げるために移動していると思うのでそのような現実も考慮しながら、胆江ブロックにおける学校の配置を考えていかなければならない。
・ 生徒の減少を考えると学級減を考えざるを得ない。その中で前向きな部分として、生徒の希望を叶えられるような学科を考えたとき、１学級分の定員を確保できる希望数になっていないところもある。

【県教委】

・ 県南の地域ではＩＬＣの関係もあり、理数科等を強化した方がよいという意見もいただいている。ＩＬＣ設置の決定はもう少し先になるということで、現段階ではそこまで計画に盛り込めないという状況であり、もしＩＬＣの設置が決まればそのようなことも十分考えて検討していきたい。

【田面木　奥州市教育委員会教育長】

・ 第２回の地域検討会議で金ケ崎町長から、もっと具体的な話をしないと議論が深まらないのではないかという意見があった。胆江ブロックにはほとんどの学科があるが芸術やスポーツ関係の学科が無いので、そのような学科を設置する等の具体的な提案がないと、議論が深まらない。そこの部分がどうなっているのか教えて欲しい。
・ 前回も話をしたが、資料№４を見ると卒業者数と入学者数に約 300 人の差がある。この理由について県ではどのように捉えているのか。
・ 中学生のアンケートの中で、学校を希望する理由で地元の学校だからという回答が当地区は低いということだが、そこの部分の理由を分析しなければならない。進学・就職に有利だからという回答が多くなっており、質問内容をもっと精査していかないと分からないのではないか。

（次頁に続く）

【県教委】

・ 再編にあたっての県教委としての基本的な考え方として、望ましい学校規模に満たないということのみを理由に再編の対象とはしないということを今回初めて示している。

・ １学級校については、小規模であることによる課題という部分も顕在化してくるが、通学が著しく困難な場合には、教育の機会の保障の観点から特例として存続させることも検討する。一方で、近隣に高校が存在し、当該高校以外の高校への通学が容易な地域においては、地域の状況等も考慮しながら統合も視野に入れ検討するというような考え方、そして統合の基準は設置の方向ということを示させていただいたところ。

・ 当ブロックのアンケート結果では体育や芸術の希望があったが、体育や芸術ではある程度広域性が必要となり、各ブロックに設置するのは難しいと考えている。以前、他ブロックで入学者を確保するために体育学科を設けたこともあったが、生徒が集まらず数年で閉科した。

・ 当ブロックの状況として、普通科が３校あり、通学もある程度可能ではないかという部分も見られるので、何らかの形での統合も視野に入れて考えていく必要あると考えている。

・ 総合学科高校では生徒減少から、系列の再編ということも考えていかなければならない。

【県教委】

・ 昨年度の高校入試の倍率は 0.93 倍であり、１倍を大きく割っている。胆江ブロックは全県と同じ 0.93 倍であるが、このような状況が中学生の学習意欲にも影響が出ているのではないかという意見もいただいている。そうしたことも踏まえると、やはり統合を行わない場合でも学級減は着実に実施しなければならないと考えている。その中で現状の定員の状況、欠員の状況を見た場合に統合をしなければ、学校規模はかなり小規模になるところも出てくることも念頭に意見を伺いたい。

【江口　奥州市副市長】

・ 北上市や一関市に生徒が流れているとのことだが、この地域の高校の魅力が足りないということなのか。他ブロックでも同じようなことが起こっているのか、要因を分析していれば教えてほしい。

・ 大学に進学したい中学生の比率が胆江ブロックでは低いが、このブロックの高校が進学について強化していないからというような見方が成り立つのか、他の要因であると考えられるのか教えてほしい。

【県教委】

・ アンケート結果から胆江ブロックでは私立高校を希望する比率が高く、北上市や一関市等の他のブロックの私立高校を希望しているところもあると考えている。

・ 岩手中部ブロックから両磐ブロックまでの地区は東北本線で結ばれており、前沢区や金ケ崎町は他ブロックに接しており、地理的な部分で生徒の移動がこのブロックに収まりきれないということもあると考えている。

【江口　奥州市副市長】

・ 生徒の移動については岩手中部や両磐ブロックでも同じようなことが起きているという理解でよいのか。

【県教委】

・ 当ブロックの平成 24 年度から 26 年度の平均の生徒の流動では、他ブロックからの流入は 89.7 人、このうち岩手中部ブロックから 46.3 人、両磐から 36.7 人である。流出は 228.3 人、このうち岩手中部ブロックへ 101.3 人、両磐ブロックへ 60.7 人、盛岡ブロックへ 35 人である。

・ さきほど卒業者と入学者の差が約 300 人との話があったが、当ブロックの私立の入学者を差し引くと約 200 人の差となる。

（次頁に続く）

・ 岩手中部、両磐ブロックでは転入が多くなっている。他のブロックでは前再編計画で新しいタイプの学校をつくったが、胆江ブロックはそのようなことが無かったということの影響もあるかもしれない。

【県教委】

・ 胆江ブロックの進学希望が少ないことについて、詳しく分析した訳ではないが、進学するか就職するかは生徒の将来に対する考え方もある。アンケート結果では大学・短大に進学したいと明確に回答した生徒の割合は確かに少なくなっているが、進学したいが大学か短大か専門学校かは未定であるを合わせれば差は縮まる。

・ 地域の産業の特徴等の影響や、小学校、中学校と学校生活を送る上での環境によって進路に対するイメージがつくられてくる。保護者の考え方等にも影響を受けながら、進路に関する考え方が形成されてきた結果とも受け止められると思う。まだ詳しく分析した訳ではないが、そのような印象である。

【県教委】

・ 今の分析は高校側からの視点であるが、逆に中学校から見た進学先についてどのように考えているのか。

【佐々木　胆江地区中学校長会会長】

・ 他ブロックに流れる生徒が多い理由は、一つではないと思うが、象徴的な例は大谷選手の様に甲子園を目指し、その可能性の一番高い県内の高校はどこかと探し、自分の夢を叶えるのに適する高校が他のブロックだったという生徒は毎年ある一定人数がいるのは確かである。

・ 学習面においても、高校卒業後の進学を考えた場合に当ブロックの中でも可能であるが、他のブロックの高校の方が少し魅力があるかと選択する生徒もいる。

・ 大学進学率が低い理由も難しく、１つや２つではないと思うが、気になっているのは胆江ブロックには大学も短大も無いことである。大学、短大が無いのは沿線では二戸と胆江だけである。身近に大学生を見る機会が少なく、大学をイメージしにくいということもあるかもしれない。大学に進学しなくてもこの地域であれば生活していけるという安定感も理由の一つにあると思う。

【県教委】

・ 県では毎年高校生に対して意識調査をしているが、その中で、高校１年生が高校に入って一番やりたいことは何かということに対する回答で、一番多いのは勉強で毎年 50 数%である。過去数年この調査をしているがほとんど変わらない。２番目が部活動である。そのことを踏まえると、学業があり部活動があり、その中で子ども達、保護者がより自分の進路を実現するために最もふさわしいところはどこか、様々な条件がある中で考えて進学をしていると考えている。

・ 当ブロックは他ブロックに行かなくてもほとんど全ての学科が揃っているが、もし他ブロックに出で進路がより実現するのであれば、という観点で出て行っているのではないかと考えている。

【県教委】

・ アンケートの質問１では、私立高校を志望する割合が全県より高くなっているので、私立高校の野球部等を考えている生徒がいると思う。

・ この地区の特長として、一関高専への進学があり、高専に進学する生徒が一定数いるのでその影響がある。

・ 進学率については水沢、一関、北上の進学校の大学進学実績は同じ程度であるので、水沢高校も評価されていると思う。

（次頁に続く）

【江口　奥州市副市長】

・ 私立高校については仕方がないが、魅力的な高校が胆江ブロック外にあり、当ブロックの高校は生徒を引きつける力があまりないような感じを受けた。200 人以上の生徒が流出しているのはかなり深刻な状況だと思う。当ブロックの高校は魅力という部分で弱さがある気がするが、その辺はどう考えているか。

【県教委】

・ 水沢高校はＳＳＨ（スーパーサイエンスハイスクール）の事業に取り組み、今年度３期目であり、ＳＳＨを目指して入学を希望している生徒もいる。

・ 水沢商業高校では商業高校としてかなりの優勝旗を稼ぐ等の実績があり、活躍している。ござえんちゃハウスという取り組みも行い、地域に定着し地域から楽しみにされている。

・ 水沢工業高校は特色ある学科があり、様々活躍しており、求人も地域を含め県外からも数多くいただいている。

・ 岩谷堂高校は総合学科として、農業、工業関係もあり、総合学科の特長を生かしながら人材の育成をしている。

・ 水沢農業高校も頑張っており、当ブロックにはそれぞれ特色ある学科がバランスよく配置されていると捉えている。他のブロックにはない特色ある学科が配置されており、中学生はそれぞれの学科の特長を比較しながら進路を考えて選択できる。

・ 小中学校とは異なり高校はある程度広域性があり、その中で判断していく必要もあるので、当ブロックの高校に魅力が無いということではなく、中学生が広域的に考えている部分があると捉えている。

【新田　金ケ崎町教育委員会教育長】

・ 中学生のアンケート結果から意見を述べたい。胆江ブロックの中学３年生 1,299 人を母体として考えてみた。このブロックの募集定員は 1,040 人であり、他ブロックや私立高校に流れることを考えると現状の定員で良いと思う。

・ 普通科系の３校については 440 人の定員に対して、普通科の希望が約 52%あるので、1,299 人の母体で考えると約 680 人が希望しており、およそ良いと思う。

・ 工業系、商業系では募集定員に近く現状で良いと思うが、農業系の学科については希望が少ないので学科の再編の必要性を感じ、総合学科高校についても希望者が少なく学級減について将来は検討しなければならないと思う。このような現状の中、５年後には更に 100 人以上の生徒が減る状況も考慮しなければならない。

・ 学校規模について、県では望ましい規模を示しているが、中学生のアンケート結果では１学級、２から３学級でも良いと考えているブロック内の生徒は 50%を超えている。したがって、１学年２学級でも子ども達は良いと考えていることも考慮してほしい。

・ 高校卒業後の進路について、進学を考えている胆江ブロックの生徒は６割を超えており、就職についても全県より多い。普通高校以外の高校でも進学を考えている生徒も増えてきているので、普通高校以外でも進学の指導体制をとってほしい。

・ 子ども達が減っていくという事実は避けられないが、子とも達あっての学校であるので最初から望ましい学校規模ありきではなく、子ども達の希望も入れながら学校、学科の再編や統廃合を検討してほしい。

（次頁に続く）

【県教委】

・ アンケート結果のみで学科の配置を決定することはできないが、子ども達の意見も十分踏まえた上で、各年の入試での定員の充足状況を勘案し、学科、学級数の設定を考えていきたい。

・ 学校規模について、高校の学級数を中学生に聞くのが適切なのかどうか悩みながら調査したが、思った以上に１学級の希望が多かった。中学校の学校規模は大きいところが少ないと思うので、２から３学級と回答するのが多いことが予想されたが、この結果を十分勘案しながら検討していきたい。

【県教委】

・ 専門高校からの進学について、最初から大学に行ってさらに学習を深めて専門的な分野に進みたい生徒は、基本的には普通科を希望する。工業、商業、農業を専門的に学んだ上で進路を考えたい、場合によっては進学も視野に入っている生徒は、専門高校を選択する。

・ 専門高校からの進学については専門学校等もあるが、専門の大学から指定校等も受けているので大学進学の道もあり、将来の道を決めて最初から大学に進学したいと考えて専門高校へ入る生徒もいる。

・ 商業高校から商業系の大学、工業高校から工業系の大学、農業高校から農業系の大学という選択肢があり、そのルートで進んでいる生徒もいる。工業高校では工業系大学に進学し工業高校の教員になっている者もいる。

・ 一日体験入学や進路学習会の際には校長、副校長、教務主任が中学校に出向いて説明しているが、専門高校から大学等へ進学できることが中学生に十分伝わりきれていない部分があるかもしれない。高校側からもっとＰＲしていく必要がある。

【菊池　奥州市ＰＴＡ連合会副会長】

・ 専門高校から大学への道について、中学生が理解しているかは高校を選択する上で重要な問題である。

・ 以前は私立高校へ進学するのは滑り止めという意識があったが、今は何かに特化した私立高校に行きたい生徒がおり、私立高校だけを受検し、公立高校は受検しない生徒が非常に増えてきている。

・ 私立高校を希望する理由として、大学進学に有利だからと答える生徒が増えてきている気がする。

・ 工業高校、商業高校、農業高校でも大学に行けるということは今後もっとＰＲしてほしいし、むしろ既存の高校の特色をもっと中学生に理解してもらうことで、他ブロックに流出しなくなるのではないか。

【県教委】

・ 高校の立場としては高校の特色をＰＲしているつもりであるが、地域検討会議等での意見を聞くとなかなか届いていないと痛感する。

・ ＰＲの機会としては夏休みに行う高校一日体験入学、秋の中学校の進路学習会、学校毎に行っている文化祭等があり、学校紹介ではＤＶＤ等で映像や音楽を交え工夫している。

・ 様々な機会でＰＲを行っているが、中学生が進路に意識がいく時期の問題や保護者への説明不足も感じている。

・ 私立高校はＰＲが生命線であるので、業者に委託しているようなビデオや映像でかなり充実したプレゼンをしている。公立高校はそこまでできないので、口頭での説明が中心になるがＰＲの点ではこれから考えていく部分もあるかもしれない。

（次頁に続く）

【県教委】

・ 学校の魅力として学校の特長付けをすることについては、公立高校の中では限界もあるということを御理解いただきたい。

【千葉　金ケ崎町農林水産関係者代表】

・ アンケート結果で農業高校への希望者が少ないのが気になった。大きな社会の流れ中で学歴社会が大きな割合を占めてきたのではないかと思う。比較や競争の中で、子ども達が大学に進学し、良い就職するのが目標という環境の中で育った結果がこのように表れたのではないかと思う。これから子ども達が減っていくときに本当にこの考え方で良いのか。

・ これから人口が減っていくのだから一人ひとりの個性を引き出し、伸ばしながら、助け合う社会をつくっていく必要があるのではないか。

・ 中学生のアンケート結果に沿った学科編制をしていくのかについての意見は様々だと思うが、食というのは避けては通れない大事な分野である。農業分野が減っていくというのは生活に関わる部分なので農業に関する学科も大事に考えていただきたい。

【県教委】

・ 水沢農業高校の場合、農業系の学科もあるが、生活科学ということで家庭科系に近い学科もあるので農業だけでなく家庭を希望する割合も含めて考えていかなければならない。

・ 農業高校に行っても必ずしも農業に従事しない場合もあり、幅広い地域の人材の育成の中で、アンケートの結果も参考としながら産業界や地域の皆さんの意見も考慮した上で、学科の検討をしていかなければならない。

【県教委】

・ 岩手県にとって農業は基幹産業であり、農業の後継者の育成は大事なことである。平成 28 年度の高校入試から推薦入試の際に応募基準を拡大し、例えば農業の後継者を目指すというような意欲を持った生徒も応募できるようにしている。専門分野の後継者を目指す生徒の意欲を推薦基準に設けるもので、農業系高校では多く採用している。

・ 将来の職業に対する理解は高校の努力だけでは不十分な部分があり、小中学生にいかに理解してもらうかが大切であるので、幼稚園、小中学校のキャリア教育という観点では地域の応援もいただければありがたい。県としての姿勢も必要であるが、より生徒に密着している地域の方の職業への理解や協力もいただければありがたい。

【新田　金ケ崎町教育委員会教育長】

・ 再編計画を策定するにあたり、義務教育の小中学校と県立学校との間に密度の濃い連携、例えば岩手の子ども達をどう育てていくのか、そのために高校にはどんな学科が必要か、中学校段階ではこのような子ども達を育ててほしいというような話し合いはあるのか。学校現場では無くても県教委の中ではあるのか。

【県教委】

・ 中高の連携については取り組んでいる。県教委の中でも、義務教育担当と高校教育担当と密に連携を取っている。各地区においても校長協会での中高の会議は年２、３回開催し、情報交換をしている。情報交換の内容は地区によるが、中高の連携は年々充実してきている。

・ キャリア教育的な観点については今後取り組んでいく必要があると考えている。

【県教委】

・ 高校再編の基本的な方向を示す「今後の高等学校教育の基本的方向」を作成する際には、義務教育担当からも十分意見をいただき高校教育のあるべき姿ということを議論してきた。　（次頁に続く）

【田面木　奥州市教育委員会教育長】

・ 胆江ブロックでは学校の統合ではなく、学級減で対応していかざるを得ないと思っている。
・ 高校の選択については学力で選別されているところがあり、本当に希望する高校ではないところに入学し辞める生徒もいるが、私立高校は生徒に沿った非常に丁寧な指導をしている。
・ 小中学校でも自己肯定感、自分に自信を持てるという力をどう付けていくか悩んでいる。これを持つことによって、農業高校に行きたい、商業高校に行きたいと明確な目的がでるのではないか。
・ 岩手の子ども達をどうしていきたいのか、成績の良い生徒だけで無く、その他の生徒のことも考え、学科編制についてはさらに検討していく必要があると思う。

【県教委】

・ 高校教育では、知・徳・体を備えた調和のとれた人間形成、総合的な自立した社会人としての資質を有する生徒の育成を目指しており、再編計画の基本の考え方として今後の岩手を担っていく人材の育成を目指しながら、生徒にとって望ましい教育の環境の整備ということを前提に考えていきたい。
・ 中学生へのアンケートについては、前回と同じ 12 月に実施していれば、また違った結果となったかもしれない。また、どの学科を選択するかということについても、自分の将来をどのように考えるかということで選択されていくものだと思う。これらを十分考慮しながら検討していきたい。

【高森　奥州商工会議所事務局長】

・ 再編計画を策定する上では、基本的には中学生のアンケート結果を肯定的に捉えてほしい。
・ 生徒数が減るので学科について検討することは当然のことであると思うが、各地域で高校も地域の社会資本の一つであることを大前提としていただきたい。

【佐々木　胆江地区中学校長会会長】

・ 高校には合格はしたが卒業するまで頑張ってくれるかどうか心配な生徒もいるが、そのような生徒に限って元気で頑張っていると挨拶に来たり、活躍をしたりと嬉しく思っており、高校の先生方には感謝している。
・ 自分に合った学科選択が難しいのは確かであるが、生徒や家族がその生徒にあった学科を考えて選んだ以上、何とか頑張ろうと入学をしている。
・ ５年後には４学級分、10 年後に７学級分の生徒が減少するということから、募集定員減になるのはやむを得ないと思う。
・ 生徒の選択肢の維持をお願いしたい。選択肢というのは学校なのかもしれないが、学科の数も維持してほしいと思う。
・ ブロック内の専門高校は最低規模で頑張っていると思う。これ以上学科数が減った場合には専門高校としての学びが難しいと思う。定員減はやむを得ないが学科数の維持をお願いしたい。

【県教委】

・ 可能な限り現在の学科を維持できる再編を基本とし、それぞれの農業、工業、商業の大学科は残すような形での検討を考えている。前回の会議では、それぞれの学科を残し、校舎間を生徒が移動するような校舎制について紹介させていただいた。将来的な対応としては校舎制も視野に入れながら検討していかなければならない。募集定員の減についてはやむを得ないとの意見をいただいたが、その他の方からも意見を伺いたい。

【石川　金ケ崎商工会議所事務局長】

・ 今回の意見を 12 月に発表される再編計画案にどのように反映させるのか。　（次頁に続く）

【県教委】

・ 直ちに学科を減らすという形の考え方を持たずに検討したい。ただし、生徒の減少への対応では学級数の調整は必要になるため、そのようなことを勘案しながら検討していく。平成 32 年までを考えると４学級程度の学級減が必要となるが、生徒の選択肢の確保を求める意見が多いこと、学級減等で対応するということはやむを得ないのではないかという意見を考慮しながら考えていきたい。

・ ただし、前期計画では当ブロックは普通高校が３校あり、通学が可能であると見込まれているので、統合も視野に入れつつ検討が必要と考えている。

・ 総合学科については系列についても考えなければならない。後期計画に向けては専門学科の取扱いについて、統合も視野に入れた対応も必要となってくると思うので、校舎制の可能性も含めて検討していかなければならない。その中で、できる限りいただいた意見を反映できる案を示したいと考えている。

【新田　金ケ崎町教育委員会教育長】

・ 今後再編計画案を示すということであるが、４回目の地域検討会議の開催予定はあるのか。

【県教委】

・ 各ブロックの地域検討会議を 11 月末まで行い、その後、教育委員会議等で検討し、可能であれば本年中に案を示し、来年１月から２月にかけてパブリックコメントを実施し、その際に第４回の地域検討会議を開催したい。また、地域住民を対象とした意見交換会も別途開催したい。そのようにして再編計画案に対する意見を伺った上で、成案化していく流れを考えている。

【菊池　奥州市ＰＴＡ連合会副会長】

・ 中学卒業者数の減り方には増減があるが、再編では一度に学級数を減らすのか、それとも段階的に減らしていくのか。

・ 流入生徒数と流出生徒数のデータがあれば検討材料になるので次回の資料として出してほしい。

【県教委】

・ 仮に学級減となった場合の対応であるが、平成 28 年度から５年間の前期計画を作る場合、一度に 32 年度に学級減をするのではなく、生徒の卒業者数の推移を見ながら年次計画的な形で示していくことを考えている。

・ 卒業者数は平成 32 年から 33 年で大きく減ってその後一度戻るということがあるので、平成 33 年だけを考えて減らすのではなく、卒業者数の推移を十分考えていきたい。

・ 資料については検討させていただく。